フィールド（現場）からの風 ⑳

宮田守男

地域の産業や課題をどの様に循環するかで、新しい着眼点を考えてみませんか

毎日、新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどを通じて情報発信される県内各地の話題。その中でも、年々興味深くなってきた中野市・一本木公園を10月初旬訪ねる。誘導看板は少なかったが、住宅地の一角に多くの車を発見。近づくと庭園の一画を使用した臨時駐車場に。誘導員から「協力金の500円をお願いします」との案内。初めて、入園料が不要な事が理解できる。開催中の「バラまつり」が楽しみでの訪問。早速、公園内をゆっくり鑑賞する。

一本木公園は、1984年、中野市民の憩いの場として開設。須坂市の黒岩喜久雄先生が、251種251株のバラの生木を寄贈したのが始まりだと知る。公園の一角に、オーナー園の表示。公共施設内にと興味が湧きスタッフに尋ねる。すると一本木公園バラの会の説明を、目を輝かせてしてくれる。

1994年、バラの苗木一株を中野市に寄贈したバラオーナーと会に賛同した皆さんで設立、現在130名程活動しているとの事。「バラまつり」の企画や運営、バラ花壇のバラの剪定（せんてい）、花ガラ摘み、草取り、チップ敷き、冬囲いなどの作業など行い、平成18年4月からは、公園の指定管理者に。今回の出店や、イベントも運営していると楽しそうに話してくれる。園内は、イングリッシュガーデンの整備もされ、見どころ満載。無料でこんな楽しい時間が過ごせるのかと驚きにさえ感じる。

売店では、地元の野菜・果物・キノコなどの販売。フードブースで販売する「バラの酒」や「バラのまんじゅう」、「菓子」などは中野市の名産品になりつつあるとの熱弁に。話題になり、多くの人を引き寄せるのは、人の温かさが重要と再認識できた場所を訪ねられた幸せをかみしめる。一部の人達が企画運営するイベントではなく、地域に住む多くの人達とのつながりを大切に、多様化している情報発信の仕方を工夫すれば、新たな観光スポットが誕生させられるのだと痛感する。

公園の一角に、「アサヒビール」の標柱。昭和52年までホップの乾燥場だったことが分かる。その跡地に、地域住民との協働や中野市で盛んに栽培されているキノコ類の使用済みの大量の培地を、土づくりに利用して、バラの苗木などの鉢土として活用した知恵は、産業振興の展開でも、地域資源を循環する工夫が大切と知った一日でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

……

バラ公園は、優しい空間として感じられ、地元の皆さんの温かさが心地よい